

## 英米の俗信 (6)

小泉 直

外国語教育講座

### The Superstitions of Britain and the United States (6)

Naoshi KOIZUMI

Department of Foreign Languages, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

#### はじめに

本稿は、英米に古くから伝わる俗信の起源とその内容を明らかにすることを目的とする研究の一部を成すものである。これまで日本で英米の俗信を本格的に紹介した文献は、筆者の知る限り、東浦ほか(1974)の1点だけである。しかし、この文献は扱っている分野が偏っているだけでなく、各分野で取り上げている項目とその内容も限定的で、網羅的とは言い難い。そこで、本研究では、できる限り組織的に英米の俗信を紹介することを目標とする。本研究では、これまでに「日用品」、「身体」、「数字」、「行為・生理現象」、「色」、「天体」、「人生」、「左側・右側と太陽回り、時計回り」、「飲食物」、「曜日」に関する俗信について解説してきた。本稿では、新たに「動物」と「建造物」にまつわる俗信を取り上げる。以下の解説では、質・量ともに優れているという理由から、Lasne and Gaultier (1984), Pickering (1995), Radford and Radford (1969), Waring (1978), Zolar (1990)を資料として選び、これらの文献における記述の中から2冊以上に共通する内容(それゆえ、人々によく知られている内容)を精選してまとめたものである。ただし、上記の5つの文献だけでは不十分もしくは不明確と思われる箇所については参考文献に挙げる他の文献も参照して補足している。

#### 1. 動物

##### 1.1 マムシ (Adder)

マムシはイギリスで唯一の毒蛇である。マムシに出会うのは幸運の前兆と見なされている。特に春に出会う最初のマムシは、殺すと敵に対して勝利が保証されると信じられている。しかし、マムシが生きのまま逃げてしまったなら、災難と悪運に見舞われることになる。

イギリスの古い言い伝えによると、玄関への上がり階段で見かけるマムシは死の前兆であるとされる。

マムシの皮を(屋根を支える)垂木に掛けておけば家が火事になることはない。マムシの皮を煙突に掛けておけば幸運がもたらされる〔レスターシャー(イングランド中部の州)〕。

田園地帯では、マムシはどんなにひどく傷ついても日没前に死ぬことはないと思われている。しかし、マムシはトネリコの木を恐れ、その枝で打撃を与えるとすぐに死んでしまうと言う人もいる。

マムシに咬まれた場合の治療法に、そのマムシを殺して、死骸で傷口を擦る、あるいは、マムシの脂身から作られた軟膏を傷口に塗るというものがある。17世紀に行われていた治療法は、生きているハトを傷口に当てて、死ぬまで毒を吸い取らせるというものであった。また、デヴォンシャー〔デヴォン(イングランド南西部の州)の旧称〕の治療法は、咬まれた手足を殺したニワトリの胃の中に突っ込み、ニワトリが冷たくなるまで待つというものであった。ニワトリの肉が黒くなれば傷が癒えたことになるが、色が変わらなければ毒がすでに全身に回ったことを意味した。

##### 1.2 動物 (Animal)

イギリスでは、果樹はその根元に動物の死骸を埋めずに植えると実をつけないとされていた。また、イギリスの多くの農場主は、未だに品評会に参加させた動物を褒めると取引に失敗すると信じている。そのため、逆に動物が首の骨を折るなどのひどい運命を言うことで運を高めようとする。

##### 1.3 アナグマ (Badger)

アナグマの菌を1本ポケットに入れておくとトランプゲームで幸運に恵まれる〔デヴォンシャー(デヴォン(イングランド南西部の州)の旧称)〕。

##### 1.4 フジツボ (Barnacle)

年老いた船乗りの間には、船底からはがれたフジツボはガンに変身するという奇妙な言い伝えがある。こ

の言い伝えは、カオシロガン (barnacle goose) が海で腐っていく材木から孵化するという中世の俗信に由来すると考えられている。

### 1.5 コウモリ (Bat)

コウモリが近くを飛んだら、それは誰かがあなたを裏切ろうとしているか、魔法をかけようとしているという警告である。コウモリが家の周りを3回飛ぶか、家の中に入ってきたら、それはその家の住人が近いうちに死ぬ前兆である。コウモリが病人のいる部屋の窓ガラスにぶつかったら、その病人は死ぬことになる。

日没後すぐにコウモリが巣穴から現れて戯れながら飛んでいたら、それは穏やかな晴天になる印である。しかし、コウモリが建物にぶつかったら雨になる。

コウモリの骨は身につけていると幸運に恵まれる。コウモリの血で顔を洗うと暗闇でも物が見えるようになる。コウモリの右目をベストのポケットに入れておくと、その人の姿は見えなくなる。

スコットランドでは、コウモリが上昇してから地面に向かって下降するのが見られたら、それは魔女の時(特別に保護されていない人間すべてに魔女が影響を与える時)がやって来ると考えられている。魔女を遠ざけておくためには、納屋や物置小屋のドアにコウモリの死骸を釘で打ちつけておくとよい。

田園地帯では、コウモリが女性の髪に絡まったら、逃がしてやるには髪の毛を切るしかないと言われている。

マザーグースにはコウモリについて次のような歌がある。

Bat, bat,  
Come under my hat,  
And I'll give you a slice of bacon;  
And when I bake  
I'll give you a cake,  
If I am not mistaken.  
コウモリ, コウモリ, 帽子の下に飛んで来い,  
そしたら, ベーコンを1切れあげよう。  
今度ケーキを焼いたら1切れあげよう,  
ぼくが失敗しなければ。

### 1.6 クマ (Bear)

最もよく知られている俗信は、クマの子供ははつきりとした形を持たずに生まれてくるので、母クマが舐めて形を整えてあげるといふものである。

かつてクマの脂肪は禿げの治療薬として使われていた。クマの脂肪は、また、園芸用の道具に塗っておくと植物の病害を防いでくれると信じられていた。百日咳にかかった子供はクマの背中に乗ると病気が治ると言われていた。さらに、クマの毛皮はその上で寝ると腰痛が治り、盲目に対する優れたお守りになるとされた。

アメリカ合衆国では、クマは7年に1度しか子供を産まず、しかも産む時はひどく騒ぎ立てるので、近所で生まれようとしている他の動物が死産になると言われていた。

### 1.7 黒ネコ (Black Cat)

イギリスでは、黒ネコと出会ったり、黒ネコが行く手を横切ったりするのは縁起がよいとされる。しかし、アメリカ合衆国とヨーロッパの一部(例えば、ベルギーやスペイン)では、逆に縁起が悪いと見なされている。イギリスでは、黒ネコが招かれていないのに家や船の中に入ってくるのは吉兆とされる。そのような場合は、追い出してはならない。追い出すと、家や船の運を持って行かれることになる。ヨークシャー(イングランド北東部の旧州)では、漁師の家で飼われている黒ネコは海での安全を保証してくれると信じられていた。

田園地帯では、聖アントニー熱(皮膚の炎症の一種)は黒ネコの耳から血を採って患部に擦りつけると治ると言われている。コーンウォール(イングランド南西端の州)では、帯状疱疹は黒ネコの尻尾から血を採って患部に塗ると治るとされる。

### 1.8 子ウシ (Calf)

イギリスでは、瘟疫(ウシの伝染病の一種)を食い止めるために子ウシが生きのまま焼かれていた。また、他のウシの流産を防ぐために、流産した子ウシの死骸をすべてのウシの目につくウシ小屋の壁に釘で打ちつけておくことがあった。ダラム(イングランド北東部の州)では、群れの何頭かが亡くなると、病気を食い止めるために死んだ子ウシの足とももが農場主の家の煙突に吊るされた。

イングランドの一部の地域では、雌ウシが双子を産むのは不吉であり、しかも双子のうちの1頭の背中に白い縞があれば2重に不吉であると考えられていた。多くの農場で、子ウシが地面に横になっている時にその上を跨ぐのは縁起が悪いと言われていた。

ウェールズでは、月が欠けていく時に離乳させられた子ウシは決して太ることがなく、痩せたままであると言われている。ノーサンバーランド(イングランド北東部の州)では、ポケットに乾燥した子ウシの舌先を入れておくと、危険から守られるとともに、ポケットからお金がなくなることはないと言われ、その舌先は「幸運の舌先 (lucky tip)」もしくは「幸運の1切れ (lucky bit)」と呼ばれていた。ウスターシャー(イングランド西部の州)では、クリスマスのヤドリギの枝を新年に最初に子ウシを産んだ雌ウシに与えれば群れ全体に幸運がもたらされるが、与えなければ悪運に見舞われると信じられている。

### 1.9 ネコ (Cat)

ネコが1回くしゃみをしたら雨になる。3回くしゃみをしたら家族全員が風邪を引くことになる。結婚式の朝、ネコが花嫁のそばでくしゃみをしたら幸福な結婚生活が保証される。

ネコが走り回ったり、じゅうたんを引っ掻いたりしていたら強風になる。ネコがテーブルの足を引っ掻いていたなら、それは天気が変わる印である。ネコが足で耳越しに顔を洗っていたら大雨になる。ネコが火に背中を向けて座っていたら、霜が降りる(地域によっては嵐になる)。ウィスコンシン(アメリカ合衆国北中部の州)では、ネコが戸口に座って顔を洗っていたら、近いうちに聖職者が家にやって来ると言われている。

坑夫は坑内にいる時に「ネコ (cat)」という言葉の口にしようとしな。船乗りの間では、船上でネコが戯れていたなら、それは強風の前兆であると言われている。船上でネコが鳴いたら、それは危険な航海の前触れである〔ウェールズ〕。

ネコが棺の上を飛び越えたら、その猫を捕まえて殺さない限り災難が起こる。ランカシャー(イングランド北西部の州)では、家の中でネコが死ぬのは縁起が悪いとされる。

買ったネコはネズミを捕らない。

5月に生まれたネコはネズミを捕らず、代わりにヘビやツチボタルを家の中に持ち込む〔デヴォン(イングランド南西部の州)とウィルトシャー(イングランド南部の州)〕。

家族の病気を治したければ、患者の身体を洗って、その水をネコにかけるとよい。その後、その猫を追いつせば、病気を一緒に持って行ってくれる。その他の民間療法として、

- ・ネコの尻尾を目の上に被せると、ものもらいが治る。
- ・乾燥したネコの皮を顔に当てると歯痛が治る。
- ・ネコをオリーブ油で茹でて作った調合薬は傷口に効く。

などがある。

### 1.10 雌ウシ (Cow)

スコットランドでは、白い雌ウシから採った牛乳は他のウシのものより品質が劣ると言われている。アメリカ合衆国では、赤い雌ウシの肉が最上であると信じられている。

雌ウシが頭を3回下げたら、それは死の前兆である。

柵で囲まれた庭に雌ウシが侵入したら、庭の所有者の家族に死人が出る。もし雌ウシが3頭侵入したら、死者が3人出る〔イングランド中部地方〕。

乳搾りの女が搾乳の後、手を洗わなかったら、その女の雌ウシからは乳が出なくなる。雌ウシはよいバターができるようにキンポウゲを食べる。

農場主が雌ウシを買ったら、首にロープを回して連

れて行かなければならない。子ウシを売ろうとする時には、納屋から出す時に後ずさりさせなければならない。さもないと雌ウシが子を産まなくなる。

雌ウシが尻尾を持ち上げていたら雨になる。しかし、雌ウシが尻尾を木や柵に打ちつけていたら晴天になる。

雌ウシを災厄から守るためには、夏至祭(6月24日)に雌ウシの喉に聖水を注いでアタナシオス信条<sup>1</sup>をラテン語で唱えたとよい〔サマセット(イングランド南西部の州)〕。アイルランドでは、雌ウシの群れを悪影響から守るために、サクラソウを地面に撒き、ナナカマドの枝を納屋のドアに掛けるという。

クリスマスイブに雌ウシはひざまずいてキリストを崇める〔コーンウォール(イングランド南西端の州)〕。

### 1.11 イヌ (Dog)

イヌが吠えるのは死の確かな印である。イヌが1回か3回吠えてから完全に静かになったら、それは誰かが死んだ印である。吠えているイヌに朝一番に出会うのは縁起が悪い〔アイルランド〕。

見知らぬイヌに後をつけられるのは幸運の印である。イヌが友人の間を通り抜けたら、2人の友情にひびが入る。イヌが女性の足の間を走り抜けたら、その女性は父親か夫によってひどい目に会わされることになる。スコットランド高地では、イヌが結婚しようとしているカップルの間を通り抜けたら、2人に不幸が訪れると考えられている。アメリカ合衆国では、イヌが手足を縮め、尻尾をまっすぐ伸ばして寝ていたら、それは死の前兆と見なされる。尻尾の向きによって死人の出る方角が決まるという。

イヌが草を食べたり、地面を転がったり、長い間身体を掻いていたなら雨になる。イヌがテーブルの下か安全な部屋の隅に後ずさりしたら、ひどい嵐になる。

イヌが教会に入るのは神への冒瀆である。

復活祭の季節<sup>2</sup>にイヌに子ヒツジの肉を与えると、その犬は気が狂う〔ウェールズ〕。

病人が治るかどうかわかりたければ、病人の歯を食べ物の1切れで擦ってイヌに与えるとよい。それをイヌが食べれば、吉兆であるが、イヌが拒めば、その病人は死ぬことになる。

### 1.12 イルカ (Dolphin)

船乗りの間では、イルカに出会うのは吉兆と考えられている。しかし、イルカが海岸に近づいて来たらやがて嵐になる。また、イルカが北に向かって泳いでいたら晴天になるが、南に向かって泳いでいたら雨が降って寒くなる。

イルカは海で死んだ船乗りの魂を背中に乗せて運んでいると信じられていた。

### 1.13 ロバ (Donkey)

ロバの背中にある十字の印は、キリストがしゅろの主日(復活祭直前の日曜日)にロバの背に乗ってエルサレムに入った後、名誉の証として現れたと言われていた。この印から取った毛には治癒力があり、小袋に入れて首に巻くか、細かく刻んでバターつきパンに挟んで食べさせれば、百日咳が治ると信じられている。また、百日咳にかかった子供はロバの腹の下を9回くぐらせれば(地域によっては、子供を十字の印の上に座らせ、ロバが9回円形に歩いたら)治ると言われている。

ロバは死が近づくと身体を隠すので、ロバの死骸を見かけることはないと言われている。そのため、もし死骸を見かけたら、その人には幸運がもたらされる。

人の頭をロバの蹄の切り屑で擦ると、その人の頭はロバのようになる。

ロバが耳を小刻みに動かしたら雨になる。

### 1.14 ウナギ (Eel)

ウナギの心臓を食べると予知能力が身につく。しかし、ウナギを丸ごと食べると口がきけなくなる。

ウマの毛を水の中に浸けておくと、やがてウナギになる〔ヨークシャー(イングランド北東部の旧州)〕。ウナギの皮を足に直接貼りつけておけば、泳いでいる時に痙攣が起こるのを防ぐことができる〔イングランド北部〕。

白ワインに浸けたウナギは酩酊の優れた治療薬になる。また、飲み物の中に生きたウナギを入れれば酩酊が治る。

### 1.15 キツネ (Fox)

数匹のキツネが一緒にいるのを見かけるのは縁起が悪いが、1匹だけ見かけたら幸運に恵まれる〔ウェールズ〕。ウェールズの一部の地域では、魔女がキツネに化けると信じられていた。そのため、魔女がキツネの姿になることのないよう浄火(need fire)でキツネを焼くという風習が生まれた。

キツネが家の中庭に入って来たら、それは災害と死が到来する前兆である。

百日咳の珍しい治療法に、キツネの前に牛乳を置くというものがある。キツネが好きにだけ飲んだ後、患者が残りを飲めば、咳は収まるという。

### 1.16 カエル (Frog)

カエルが自ら進んで家の中に入って来たら、幸運がもたらされる。カエルが鳴くのは雨の前兆である。カエルは死んだ子供の魂であるから、殺してはならない。また、カエルは触った者を不妊にさせる力を持つとされる。

眠っている女性から情報を得たいと思うなら、カエルの舌をその女性の上に置くとよい。人気者になりたければ、カエルの腐った骨を持ち歩くとよい。畑を鳥から守りたいければ、緑色のカエルを新鮮な土から作られた鍋の中に入れて畑の中央に埋めるとよい。

カエルを棒で突き刺し、そのカエルでいぼを擦れば、取り去ることができる。カエルが死ねば、いぼも消えてなくなる〔ウェールズ〕。若いカエルを飲み込むと、がんが治る〔イングランド中部地方〕。

### 1.17 ヤギ (Goat)

ヤギは24時間連続して見かけることがない。なぜなら、髭に櫛を入れてもらうために、定期的に悪魔のもとを訪れるからである〔イングランドとスコットランド〕。雄のヤギを船のマストに吊るしておくとも順風が保証される〔ヘブリディーズ諸島(スコットランド西方の群島)〕。人里離れた乗馬用の道に黒いヤギを見かけたら、そこに宝が隠されている〔ウェールズ〕。ヤギを自分の敷地に誘い込み、できるだけ病人のいる部屋の近くまで連れて来て追い払えば、病気を持ち去ってくれる〔アメリカ合衆国〕。

### 1.18 ハドック (Haddock)

一説によると、ハドック(タラ科の食用魚)の両側のえら近くにある黒い斑点は、キリストが5千人の群衆に食べさせようとして掴んだ時にできた指の跡であるとされる。別の説によると、黒い斑点は、聖ペテロがハドックの持ってきた献金を受けとろうとして、その魚を掴んだ時にできた指の跡であるとされる。しかし、ヨークシャー(イングランド北東部の旧州)にはまったく異なる説があり、悪魔がファイリー橋(Filey Bridge)の建設中にうっかり自分のハンマーを海に落としてしまい、慌てて拾おうとした時に間違ってハドックを掴んで印をつけてしまったとされる。

### 1.19 野ウサギ (Hare)

魔女は意のままに野ウサギに姿を変えることができると信じられていた。野ウサギに変身した魔女は牧草地にいる雌ウシから牛乳を盗み、月を象徴する銀の弾丸によってのみ倒すことができると言われていた。

一般的に、野ウサギが行く手を横切るのは凶兆と見なされている。昔、漁師は船に向かう途中で野ウサギを見かけたら、家に戻って1日中海に出ずにいた。野ウサギが道路を走っていたら、その日のうちに家が火事になる〔ノーサンプトンシャー(イングランド中部の州)〕。野ウサギが新郎新婦の行く手を横切ると、どんなに遠く離れていても、2人は幸運に見舞われる〔イングランド北部地方〕。

野ウサギはとても臆病なので寝ていても目を閉じることはないと言われている。妊婦が野ウサギを見る

と、生まれてくる子供が三つ口 (hare-lip) になるという。珍しい言い伝えに、野ウサギは年に1度その性を変えるというものがある。

若い女性が恋人に見捨てられて失意のうちに亡くなると、白い野ウサギの姿となって騙した人のもとに化けて出る〔コーンウォール (イングランド南西端の州)〕。

野ウサギの足の骨を持ち歩くと痙攣が起こらないとされる。また、野ウサギの右足をポケットに入れておくとリウマチにかからないという。

### 1.20 ハリネズミ (Hedgehog)

一般的に、ハリネズミは悪運をもたらすので、出会ったらすぐに殺すべきであると考えられている。田園地帯では、ハリネズミは夜、牧草地にいる雌ウシの乳を飲むので、採れる量が減ると信じられていた。(そのため、農場主たちは長い間ハリネズミを見かけたら殺害してきた。)

ハリネズミは転がってリンゴを棘で突き刺し、易々と持って行ってしまおうと言われている。また、妊娠中の女性がうっかりハリネズミを踏むと、その女性はハリネズミを産むことになるという。

聖燭節 (2月2日) にハリネズミは冬眠から覚めて天気を検分すると考えられている。出て来たハリネズミが外に留まれば春が訪れるが、巣穴に戻ってしまうともう6週間厳しい天気が続くことになる。

『貧乏ロビンの暦 (Poor Robin's Almanac)』 (1663年から1827年まで続いたイギリスの暦) の1733年版には、次のような1節がある。

Observe which way the hedgehog builds her nests, To front the north or south, or east or west;  
For if 'tis true that common people say,  
The wind will blow the quite contrary way.

ハリネズミの巣がどちら向きか見ておきなさい。北向きか南向きか、それとも東向きか西向きか。世間の言うことが正しければ、風は正反対の方向から吹いて来るから。

### 1.21 雌鶏 (Hen)

一般的に、雌鶏が雄鶏のように鳴いたり、雄鶏のような羽を生やしたりするのは非常に縁起が悪いと考えられている。そのような雌鶏はかつて多くの農家ですぐに殺された。また、黒い雌鶏はよく生贄として選ばれた。雌鶏がいつもと違う時間、特に昼前にねぐらに戻ったら、それは飼い主の家族に死人が出る前兆とされる。雌鶏は自分の卵の殻を燃やされると2度と卵を産まないという。

ウェールズには、元日に家にある果物を雌鶏に分け与えるという習慣があった。そうすることで、これから1年間卵をよく産むようになると考えられたからで

ある。

新婚夫婦の家に雌鶏を連れて行って鳴かせると、幸せな結婚生活が保証される〔ヨークシャー (イングランド北東部の州)〕。

雌鶏が小高い地面の上に羽を整えて始めたら、それは雨になる確かな印である〔ダービーシャー (イングランド中部の州)〕。

### 1.22 ニシン (Herring)

マン島 (イングランド北西部と北アイルランドの間にある島) の漁師の間では、漁期で最初に捕れたニシンが雌なら、その漁期は大漁であるが、雄なら不漁となると言われている。マン島では、また、船に引き上げられた最初のニシンは丸ごと茹でなければならないが、その他のニシンは頭と尻尾を切って鍋に入れておけばよいとされる。

塩漬けのニシンを1匹、一言も言わずに骨ごと3口で食べて、水を飲まずに床に就くと未来がわかる夢を見る〔アウトターヘブリディーズ諸島 (スコットランド西方の群島)〕。

聖金曜日<sup>3</sup>にニシンを天井に吊るしておけば、夏の間中ハエを寄せつけない。

### 1.23 ウマ (Horse)

悪霊や魔女が夜中にこっそり馬小屋に入り込んでウマに乗るのを防ぐため、穴の空いた石の形のお守りが馬小屋のドアの内側に掛けられた。ウマの尻尾にリボンを編み込んでおくと、悪い呪文を退けることができると考えられていた。ウマが理由もなく立ち止まったら、それは霊を感じたからである。

ヨークシャー (イングランド北東部の旧州) では、家を出る時に白いウマに出会ったら地面に唾を吐かなければ縁起が悪いと言われていた。ヨークシャーでは、また、何頭かのウマが病気で死んだら、死んだウマの1頭を埋めることで病気を喰い止めることができると信じられていた。

4本の脚が同じように白いウマを所有するのは縁起がよいが、前足1本と後足1本が白いウマは縁起が悪い。ウマが生垣を背にして立っていたら、それは嵐になる前兆である。ウマが馬小屋を出た時、右脚から出たなら万事順調であるが、左脚から出たなら気をつけた方がよい。旅行中にウマがいなくなるのは幸運の印である。

元旦に布巾を洗って、それを生垣に掛けて乾かし、その後それでウマを擦るなら、ウマは太って健康になる〔ウェールズ〕。白いウマに赤毛の女の子が乗っているのは不吉である〔アメリカ合衆国〕。

### 1.24 子ヒツジ (Lamb)

キリスト教において子ヒツジはキリストの象徴であ

り、神の子ヒツジ(Lamb of God)と呼ばれている。昔、おりの中の子ヒツジの病気を治すため、子ヒツジを生きたまま焼くという風習がイギリス全土で見られ、使われた火は浄火(need fire)と呼ばれていた。

出産期が双子の誕生で始まったら、群れは1年中幸運に恵まれる。季節の最初の子ヒツジが尻尾を先にして生まれたら、その年は牛乳と野菜しか食べられないが、頭を先にして生まれたら、1年中食肉に困らない〔イングランド北部地方〕。群れで最初に生まれた子ヒツジは幸運を呼び込むために雪の上で転がすとよい〔ロムニーマーシュ(イングランド南東部の沿岸湿地帯)〕。

ヨーロッパの多くの地域では、望まれない家族の1員は「厄介者(black sheep)」と呼ばれているが、ケント州(イングランド南東部の州)では、黒い子ヒツジの誕生は群れにとって幸運の前兆と見なされている。しかし、シュロプシャー(イングランド中西部の州)では、黒い子ヒツジが生まれた群れには悪運がもたらされると信じられていたので、最初の泣き声を上げる前に喉を切って殺された。

### 1.25 トカゲ(Lizard)

教会に行く途中で花嫁の行く手をトカゲが横切ると不幸な結婚になる。トカゲの尻尾は貴重なお守りであり、緑色のトカゲの尻尾を右の靴の中に入れておくと富と幸福が保証される。よいお針子になりたいと思う女の子はトカゲを手の上で走らせるとよい。

緑色のトカゲを食べると皮膚病が治ると信じられていた。アイルランドでは、トカゲを舐めれば、腫れを抑えたり痛みを和らげたりする能力が得られると言われていた。

### 1.26 モグラ(Mole)

家の近くにモグラ塚が突然できると、家族の中に死人が出ることになる。ウェールズでは、洗濯所や搾乳場の近くにモグラが穴を掘ると、その家の女性が翌年のうちに亡くなると言われている。

モグラを茹でた水で黒いウマを擦ると白いウマに変わる。

ポケットにモグラの足を入れて持ち歩くと痙攣除けのお守りになる。ただし、痙攣の場所が腕ならば前足、足ならば後足を持ち歩かなければならない。モグラの足はリュウマチの予防(地域によっては歯痛)のために持ち歩かれることもある。

### 1.27 ハツカネズミ(Mouse)

ノーサンプトンシャー(イングランド中部の州)では、これまでハツカネズミがいなかった家にハツカネズミが群がると、家族の1人が死ぬことになると言われている。ノーサンプトンシャーでは、また、人の上を

ハツカネズミが走り去ったら、それはその人に死が近づいている印であるとされる。ノーサンプトンシャーでは、さらに、病人の背後でハツカネズミがチュウチュウ鳴くと、その患者が回復することはないという。

ハツカネズミを1匹捕まえ、その尻尾を掴んで火の前に吊ると、焼けるにつれて家からハツカネズミがすべて逃げ出して行く〔スコットランド〕。

一般的に、調理されたハツカネズミははしか、百日咳、おねしょに効くと考えられてきた。

### 1.28 ブタ(Pig)

一腹の子ブタを連れて雌ブタに会うのはよい前兆である。ブタはニワトコの枝で打つとすぐに死んでしまう。

田園地帯では、保存処理の過程で女性がブタにさわると悪いベーコンができると言われている。田園地帯では、また、ブタは月が満ちる時に殺すべきであり、そうしないと肉が鍋の中で縮んでしまうとされる。

漁師の間では、釣り糸を投げる前に「ブタ(pig)」という言葉を口にすると不漁になると信じられている。

アイルランドでは、ブタは風を見る能力があると考えられていて、もしブタが口に糞を啜えて農場を走り回っていたら、それは嵐になる印であるとされる。アイルランドでは、また、ブタが家の中に入るのは不吉であるが、5月祭(5月1日)の朝にブタを家の中に追い込むのは縁起がよいとされる。

ブタが行く手を横切るのは縁起が悪い〔スコットランド〕。

ブタは独特な泣き声を上げて飼い主に死が近づいていることを知らせる〔ノーサンプトンシャー(イングランド中部の州)南部〕。

ブタを殺すために使った水で水浴させたブタはよく育つ〔ウェールズ〕。

### 1.29 (飼い)ウサギ(Rabbit)

一般的に、ウサギは多産なことから繁栄と成功の象徴と見なされている。また、ウサギの赤ん坊は目を開いたまま生まれてくるので、悪魔を寄せつけない力を持つとされる。こうした理由から、世界中、特にアメリカ合衆国では、ウサギの足が幸運のお守りと見なされている。(理想的には、満月の時にやぶにらみの男が殺したウサギの左足が最もよいとされる。)また、ウサギの足を揺りかごに吊るしたり、新生児の上に置いたりする光景もよく見られる。ウェールズでは、赤ん坊は生まれたらすぐにウサギの足で擦ってあげると幸運に恵まれると言われている。俳優たちの間では、ウサギの足を化粧箱の中に入れておくと成功が保証されるが、もしそれを無くしたら不運に見舞われると信じられている。

月の初めに「白ウサギ (white rabbit)」という言葉  
を3回すばやく唱え、その月の幸運が保証される。  
ウサギの肩甲骨を取り出して、それにピンを9本刺し、  
枕の下に置いておくと、愛する人に会える〔ヨーク  
シャー (イングランド北東部の旧州)〕。

コーンウォール (イングランド南西端の州) の坑夫  
たちの間では、採石場に行く途中で白ウサギに出会う  
のは災害の前兆であると言われている。また、船乗り  
たちは、出航の前に「ウサギ (rabbit)」という言葉  
を口にするのを避け、別の言葉を使う。

### 1.30 ネズミ (Rat)

最もよく引用される俗信に、ネズミは沈没する前に  
船を見捨てるというものがある。それゆえ、出航前に  
ネズミが船を出て行くのを見かけるのは凶兆とされ  
る。しかし、逆に新しい船にネズミが乗り込むのは吉  
兆である。

はっきりとした理由がないのにネズミが家から出  
て行くのは、その家が倒壊する前兆である。一方、突然  
ネズミが家の中に入って来たら、それは近いうちに家  
族の1人が死ぬ前兆である。また、ネズミが寝室の家  
具をかじったら、それは死の確かな印である。

納屋や屋根裏からネズミを追い出したいなら、部屋  
の3つの隅に聖水を撒くとよい。ネズミは聖水の撒か  
れていない4つ目の隅のそばから去って行く。しかし、  
家からネズミがすべていなくなると、家は倒壊するこ  
とになる。

子供が歯を失ったら、それをネズミに向けて放り投  
げ、もっと丈夫な歯くれるようお願いするとよい。乾  
燥したネズミの尻尾は風邪の治療薬になる。

### 1.31 サメ (Shark)

サメが船の後をつけてきたら、特にサメが3匹の場  
合は、近いうちに船上で死人が出ることになる。

### 1.32 ヒツジ (Sheep)

一般的に、旅行中にヒツジの群れに出会うのは縁起  
がよいとされる。田園地帯では、ヒツジの頭から取っ  
た小さな骨をポケットに入れて持ち歩くと幸運がもた  
らされると言われている。羊飼いの間では、出産の季  
節が白い双子から始まると、よい出産の年になると広  
く信じられている。ヒツジには天気を予測する能力が  
あると考えられていて、ヒツジが牧草地の上に静かに  
座っているとよい天気になるが、メーメー鳴きながら  
歩き回っていると嵐になる。

### 1.33 ヘビ (Snake)

教会へ行く途中で花嫁とその一行の行く手をヘビが  
横切ると不幸な結婚になる。ヘビはどんなに切り刻ん  
でも太陽が沈むまで死ぬことはない。

頭の周りにヘビの皮を巻きつけておけば頭痛に悩ま  
されることはない〔リンカンシャー (イングランド中  
東部の州)北部〕。ヘビに咬まれた傷を治すには咬んだ  
ヘビの死骸を傷に巻きつけるのが確実な治療法である  
〔コーンウォール (イングランド南西端の州)〕。

その他の俗信に、

- ・ヘビは妊婦を噛むことはない。
- ・出産間近な女性の上にヘビの皮を置くと出産が楽に  
なる。
- ・病人の首の周りにヘビの歯を掛けておくと熱が下  
がる。
- ・ヘビの頭と歯は賭博師に幸運をもたらす。  
などがある。

### 1.34 リス (Squirrel)

リスを打ち殺した者は不運に見舞われ、その狩猟の  
腕前を失う。この俗信の起源は定かではないが、リス  
がエデンの園でアダムとイブが禁断の木の実を食べる  
のを目撃した唯一の動物であるという逸話と関係があ  
りそうである。当時リスは野ネズミのような尻尾を  
持っていたが、この光景を見て恐怖に襲われ、目を覆  
い隠すために尻尾を引っ張ったとされる。そのため、  
リスは現在のような厚くてふさふさした尻尾を持つよ  
うになったという。

### 1.35 雄ジカ (Stag)

雄ジカは毎年その枝角が生え換わることから、豊穡  
と再生の象徴と見なされている。また、雄ジカの角は  
男性の生殖能力を高める媚薬と考えられてきた。しか  
し、雄ジカに出会うのは凶兆とされる。

### 1.36 ヒキガエル (Toad)

ヒキガエルは吉凶両様の評判を得ていて、病気の治  
療薬や予防薬として使われることもあれば魔法の材料  
として使われることもある。

一般的に、花嫁とその一行が教会へ行く途中でヒキ  
ガエルに出会うと、2人には幸福が保証されると言わ  
れている。

ヒキガエルは人間には聞こえない遠雷の音が聞き取  
れるので、嵐を予知する能力を持つとされる。また、  
ヒキガエルを殺すと暴風雨になるという。

寝ている女性の左袖にヒキガエルの心臓を入れる  
と、すべての秘密を自白すると信じられていた。泥棒  
がヒキガエルの心臓を身につけていると、好きなだけ  
盗んでも捕まることはない〔ヘレフォードシャー (イ  
ングランド西部の旧州)〕。

### 1.37 カメ (tortoise)

カメは長い間長寿と安定と不死の象徴と考えられて  
きた。そのため、カメを殺すのは極めて縁起が悪いと

される。

カメの甲羅のプレスレットは災いから身を守ってくれると言われていた。

痛風に悩む人の足に、カメの足を左右に対応させてぶら下げると、その痛みが和らぐという。

### 1.38 イタチ (Weasel)

魔女は悪事を働くためにイタチに姿を変えようと考えられてきたので、イタチ、特に白いイタチに出会うのは凶兆とされる。また、近くでイタチの泣き声を聞くのは死の前兆とされる。ウェールズでは、イタチが自分の前を左に向かって走ったら、その人は自分の家に敵がいると言われていた。イタチに出会うのが極めて縁起が悪いことから、もし出会ったら、じっと立って小石を3つ拾い、それらを前方に投げて7回十字を切らなければならない。

四六時中吠えるイヌは、イタチの舌を食べさせれば、主人が死ぬまで静かにさせることができる。イタチの心臓をまだ鼓動している間に食べると、1年間未来を予測する能力を得ることができる。

ヨーロッパの一部では、イタチは寝ているところを見つけ出すことができなと言われていた。

### 1.39 オオカミ (Wolf)

イギリスでは、人間がオオカミを見る前にオオカミが人間を見ると、その人は口がきけなくなると言われている。「オオカミ (wolf)」という言葉は特に12月に口にしてはならない。なぜなら、実際にオオカミに出会う危険が高まるからである。田園地帯では、オオカミのうわさをすると、すぐにその尻尾を見ることができると恐れられている。

死んだオオカミの尻尾を納屋の戸口に掛けておくと他のオオカミを寄せつけない。また、オオカミの皮靴を履くと霜焼けにならない。

## 2. 建造物

### 2.1 橋 (Bridge)

最もよく知られている俗信は、橋の上で友人と別れると2度と会えなくなるというものである。その他の警告に、

- ・新しい橋を渡る最初の人になってはならない。
- ・橋の下に立っていたり橋の下を歩いていたりする時は話をしてはならない。
- ・頭上を列車が通過している間は陸橋の下を通ってはならない。
- ・列車が下を通過している間は鉄道の上の道路に立ってはならない。

などがある。

昔は、邪眼<sup>4</sup>から守るために、橋のかなめ石の周りの

モルタルに数滴のワインを混ぜたり、石（煉瓦）造りの部分に硬貨や鉄片を入れたりした。

### 2.2 建物 (Building)

新しい建物の建設中に誰かが亡くなると、その建物は縁起が悪くなり、さらに多くの死人が出る。

### 2.3 病院 (Hospital)

赤と白が混ざった花束は死を象徴するので病院に持ち込んではいけない。

看護師がエプロンを着けている間に紐をねじったら、その看護師は近いうちに新しい仕事を任されることになる。看護師が病棟でうっかり椅子をひっくり返したら、新しい患者が近いうちにやって来る。ベッドメイキングしている間にうっかり毛布を椅子の上に置いたら、それは病棟に死人が出る前兆である。(この俗信は、かつて死者を棺に入れる前に羊毛の毛布で包んでいたことに起源があるようである。)

入院する日を選べるなら、水曜日が望ましい。土曜日に退院すると、すぐに戻ってくることになる。

### 2.4 家 (House)

1塊のパンと1皿の塩を持ってすべての訪れると、新居に幸運がもたらされる〔ヨークシャー（イングランド北東部の旧州）〕。こうすることで、そこにいるかもしれない霊に危害を加えないことが示され、結果として霊に悩まされることはない。

昔は、新居の敷居を初めて跨ぐ人は死ぬと信じられていた。そのため、家を建てる時に生贄の儀式がよく行われた。

処女が着ていたブラウスを水差しに入れて地中に埋めると家が火事から守られる。

アメリカ合衆国では、家を訪問する時には常に立った時と同じドアから出て行かなければならないと言われている。さもないと、家の所有者は幸運を持ち去られ、悪運に見舞われることになる。

鍵を置き忘れて締め出されてしまったら、従わなければならない一定の手続きがある。まず、窓から家の中に入って玄関に行き、ドアを開ける。次に、入ってきた窓から家の外に出て、もう鍵が掛かっていないドアから普通の方法で家の中に入る。

### 2.5 学校 (School)

学校に行く途中で教科書を落としたら、その生徒は授業中に間違いをすることになる。

教師は背中に目がついているので、教師の背中をじっと見つめていると質問攻めにあうことになる。

### 2.6 船 (Ship)

昔は、悪霊を脅して追い払うために船首に目を描い



たり船首像を置いたりした。

船体に打ちつけられるシャンパンのビンは一打で割れなければ凶兆とされる。(古代ギリシャ人と古代ローマ人は海の神の加護を得るために自分たちの軍艦に献酒として赤ワインを振り掛けていた。やがて献酒は船首を飾る女神像に捧げられるようになり、そのため今日でも船はsheと呼ばれることが多い。)

全部白い色の底荷を運ぶのは縁起が悪い。白は神聖な色であり、白をこのように扱うことは冒瀆的行為と見なされるからである。

船に黒ネコ1匹を乗せるのは縁起がよいが、2匹乗せるのは逆効果である。

船の名前を変えるのは縁起が悪い。船にaで終わる名前をつけるのは凶兆である。(ルシタニア号 (the Lusitania) がそのよい例である。この船は第一次世界大戦でドイツの潜水艦によって沈められたイギリスの客船で、アメリカ人も乗船していたことから、アメリカ合衆国が参戦するきっかけとなった。)

## おわりに

本稿では、英米に伝わる俗信の中から、特に「動物」と「建造物」にまつわるものを取り上げて、その起源と内容を明らかにした。

## 注

- 1 三位一体と御託身に対する信仰の必然なことを説いた短い40カ条からなる信仰箇条。アタナシウスの名を冠しているが、彼の作ではなく、6世紀以後西方教会において成ったと説く学者もある。(小林珍雄編『キリスト教百科事典』p. 34を参照。)
- 2 復活祭から昇天の祝日 (Ascension Day) または聖霊降臨祭 (Whit Sunday) または三位一体の主日 (Trinity Sunday) まで (宗派により異なる)。
- 3 復活祭の前の金曜日。キリストの十字架での死を記念する日で、教会暦上最も厳粛な祭日。教会の飾りつけはすべて取り外され、鐘は終日鳴りを潜めたままで、時に鳴ることはあっても弔鐘に似た調べを告げる。(カイトリー、チャールズ『イギリス祭事・民俗辞典』pp. 169-70を参照。)
- 4 昔から、悪魔の目すなわち邪眼を持つ人たちがいて、そのような人たちは、じっと見つめるだけで他人の健康や運命を悪化させることができると信じられてきた。特に、色違いの目、くぼんだ目、寄り目、やぶにらみの目を持つ人たちは邪眼の持ち主であるとして告発されてきた。

## 参考文献

### 俗信・迷信関連

- Donner, C. and J.-L. Caradeau. *The Dictionary of Superstitions*. New York: Henry Holt and Company, 1984.
- Lasne, S. and A. P. Gaultier. *A Dictionary of Superstitions*. New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1984.

- Lys, C. de. *A Treasury of Superstitions*. New York: Gramercy Books, 1996.
- Pickering, D. *Cassell Dictionary of Superstitions*, London: Cassell, 1995. 『カッセル英語俗信・迷信事典』青木義孝・中名生登美子訳, 大修館書店, 1999.
- Radford, E. and M. A. Radford. *Encyclopaedia of Superstitions*, Greenwood Press, New York, 1969.
- Radford, E. and M. A. Radford. *Encyclopaedia of Superstitions*, Edited and revised by C. Hole, London: Hutchinson, 1975.
- Waring, P. A *Dictionary of Omens and Superstitions*, London: Souvenir Press, 1978.
- Webster, R. *The Encyclopedia of Superstitions*, Minnesota: Llewellyn Publications, 2008.
- Zolar *Encyclopedia of Signs, Omens and Superstitions*, London: Souvenir Press, 1990.
- 東浦義雄・船戸英夫・成田成寿『英語世界の俗信・迷信』大修館書店, 1974.

### イギリス文化・ヨーロッパ文化関連

- Baring-Gould W. S. and C. Baring-Gould. *The Annotated Mother Goose*, New York: Bramhall House, 1962.
- カイトリー、チャールズ『イギリス祭事・民俗事典』澁谷勉訳, 大修館書店, 1992.
- 小林珍雄編『キリスト教百科事典』エンデル書店, 1976.

(2016年9月12日受理)